
稲垣足穂と佐藤春夫、二人の〈部屋〉小説

—大正期「生活改善運動」との関係から

旦部 辰徳

発表要旨

大正期は都市化現象が進展する過程で生じる様々な問題が顕在化しはじめる時期であった。人口集中による生活環境の悪化、消費文化の加速がもたらした虚飾といった都市化に付随する諸問題は、祐成保志(2008)が明らかにしているように、大正期から昭和初期にかけて文部省や内務省の主導により、「改良＝より良い状態への志向」／「危機＝良きものの廃退を危ぶむ」という主に二つの価値判断に基づき、家庭を単位とした住生活を「文化的に統制し、民力を滋養する「生活改善運動」というかたちで解決が図られようとしていた。明治期以降推し進められてきた都市の近代化に対し、大正初期においてその功罪を問う省察的態度が主勢となり、都市生活の合理化・健全化が目されるようになるなかで、国家＝〈公〉による市井の人々が営む生活空間＝〈私〉の領域に対する微視的な管理という問題系が立ちあがってくる。こうした、〈私〉的な場が〈公〉との緊張関係におかれ私人が占める場の存立が脅かされる事態を端緒に、〈私〉的な場＝個室が〈公〉に対する“ニヒリスティックな表現力”(ベンヤミン)を伴い欲望されてくる。大正期文学において、周囲と隔絶された閉域としての〈部屋〉が描かれるのは、そうした事情と無縁ではない。

本発表は、上記問題意識をフレームとして、「生活改善運動」の最も具体化された現れであった「文化住宅」を中心とする住宅改良に関わる言説に照らして、大正期文学作品に描かれた〈私〉的空間＝〈部屋〉のイメージの諸相を—とりわけその主題化が対照的に現れている佐藤春夫と稲垣足穂の諸作品を軸に検討するものである。

それは、まず、表面的には両者における〈趣味〉の対立として現れるだろう。住宅改良を廻る様々な議論において用いられていた〈趣味〉とは、審美的感性を指すのみならず、効率性や、贅沢と対置された合理性をもつ意匠という概念としての広がりを持っていた。「文化住宅」の室内におけるすぐれて効率的な生活導線が意識された意匠や質素さは、例えば佐藤春夫『西班牙犬の家(副題：夢見心地になることの好きな人々のための短編)』(1917)において描かれる個性的で豪華な意匠を持った西洋館内部のイメージによってずらされることになる。しかし、〈公〉のコントロールが浸潤しているという意味で〈私〉的な場は予め失われている「文化住宅」に対する反立的イメージを提示することで、私秘的な空間を擁護しようとするかのような佐藤春夫の挙措も、その内部をつぶさに描き明視しようと試

みている点で、国家による国民の生活空間に対する微視的なまなざしと重ならざるを得ない。ここには、批判する対象との共犯関係が仄見えるのである。

では、こうした共犯関係に回収されない私的空間の“ニヒリスティックな表現力”は如何にして可能なのだろうか。その一つの答えを、稲垣足穂『私とその家』(1923)における〈部屋〉内部の描写の否認というモーションに読み込むことができるだろう。

(京都大学)